

Richard II の発展

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山際, 巖 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8783

Richard II の発展

山 際 巖

(1)

前回は *Richard II* の exposition について検討した。今回は同じ作品の development を考察してみたい。その場合最も私の興味を引くのは、主人公 Richard が体験する内面的な危機と自己認識の深化である。前述したように、彼の性格が悲劇の前提として提示されているというよりは、むしろ悲劇によって性格が disclose され、かつ展開してゆくという仕組みが見られるように思われるからである。

ここで想起されるのは M. Морозов の「Shakespeare の創造した諸形象のダイナミックス」という概念である。木下順二氏はこの「ダイナミックス」という表現が、諸人物の「行動の振幅」の大きさ、「巨大に動的」な特徴を意味するかのように解しておられる。⁽¹⁾ Shakespeare の生み出した諸人物がしばしば巨大で動的であることはそのとおりであるが、M. Морозов の意味したところは、これとすこし異なるように思われる。彼は「Shakespeare の諸形象が事件の進展につれて示す変化を研究すること」に関心があり、それらの「形象がたどる進化」の検討に興味があった。

Richard III は「巨大に動的」であるが、M. Морозов によればこの人物にはダイナミックスが明瞭に表現されていない。Marlowe の創造した Tamburlaine も「激しく怒ったり悲しんだりすることができる。だがそれにもかかわらず、Tamburlaine はその性格の本質、および人生にたいする態度の本質において

は、第一部の冒頭でも第二部の大詰でもいぜんとして変らない。⁽²⁾したがって M. Морозов によればこの人物にもダイナミックスは表現されていない。一方 Romeo と Juliet は筋の進展につれて人間的に成長し進化するから、M. Морозов によれば、ここにはダイナミックスが見られる。Romeo も Juliet も「巨大に動的」な形象とは思えないので、木下氏の解釈には疑問を感じるのである。

もし「ダイナミックス」という言葉を「筋の進展につれて生ずる諸形象の変化・発展・成長」というふうに解するならば、*Richard II* の title role にはこのような意味のダイナミックスがかなり顕著である。“… the decline in Richard’s fortunes is in reverse proportion to his growth as a dignified human being, and the last act amounts to a regeneration of Richard the man…”⁽³⁾と O. J. Campbell が指摘するとおりである。Ю. Шведов が *Исторические Хроники Шекспира* の中で *Richard II* について論ずるときもこのようなダイナミックスの観点が終始叙述を貫いている。

このことはすでに Dr. Johnson も指摘しているかのようである。“In his prosperity we saw him imperious and oppressive, but in his distress he is wise, patient and pious.”⁽⁴⁾ しかし彼がこの comment を与えるのは King Richard の

Mine ear is open, and my heart prepared.

(3. 2. 93)

という台詞に関してである。実はこの台詞にすぐ続く場面が Richard の性格的な欠陥を最もよく露呈する場面の一つなのである。その欠陥とは S. T. Coleridge が巧みに表現するように “the most rapid transitions—from the highest insolence to the lowest humility—from hope to despair, from the extravagance of love to the agonies of resentment, and from pretended resignation to the bitterest reproaches”⁽⁵⁾ であり、また、“Constant overflow

of feelings; incapability of controlling them; waste of that energy which should be reserved for action⁽⁶⁾”である。この場面における Richard は決して wise でもなく patient でもない。なぜ Dr. Johnson がこの場所にそのような comment を置いたかはよく理解できないのであるが、もし彼のいう distress という言葉の意味を、王座から追われたあとの逆境というふうに解釈してもよければ、まさに Dr. Johnson の指摘するとおりである。

このことは、*Richard II* がわれわれを感動させる一要素となっているが、それはいったい何故であろうか。おそらく M. Морозов の言うダイナミックスとは作者における human nature の合法的な把握を示すものだからであろう。

(2)

Bolingbroke が Bushy と Green の兩名を死刑にしたことは明らかに越権行為であり、今の段階ではまだ Bolingbroke の王位僭望が露骨に表現されていないとは言え、この行為は示唆的である。第二幕第三場で彼が York に断言したことが真実であって、Lancaster 家の相続人として復権を要求するだけであったなら、彼には Richard の直接の家臣を死刑に処する権限も理由もないのである。

それはともかくとして、Bolingbroke が兩名の罪状を挙げるとき、その一つとして彼らが Richard に放蕩をすすめたことに言及している。

You have in manner with your sinful hours
Made a divorce betwixt his queen and him,
Broke the possession of a royal bed,
And stained the beauty of a fair queen's cheeks
With tears, drawn from her eyes by your foul wrongs.

(3.1. 11~15)

Holinshed も Richard の性格を説明するとき、彼の好色とか姦通とかにふれ
ている。⁽⁷⁾しかし J. D. Wilson も Peter Ure も指摘するように、劇の他の部分
で示される王妃と Richard の関係は、Bolingbroke の説明と矛盾している。な
ぜこのような矛盾が入りこんできたかについて説明はいろいろなされている
が、要するにこの箇所は王妃と Richard の関係を考えると参考にはなら
ない。

第二幕第一場で Richard は Gaunt の財産没収を宣言し、明日 Ireland にむ
かって出発することを告げ、不在中は York を England 総督に任命すること
に決めて退場するが、退場しながら彼が王妃に言う言葉

Come on our queen, tomorrow must we part,
Be merry, for our time of stay is short.

を見ると、Gaunt が彼に与える「放埒の炎」(blaze of riot) という非難にも
かかわらず、彼は王妃を愛しているようである。

次の場面(2の2)ではすでに Richard が Ireland にむかって出発し、残さ
れた王妃は Bushy と Bagot を相手に悲しみを訴えている。一つには Richard
と別れていることのつらさであるが、もう一つは不吉な予感からくる悲しみで
ある。いずれも Richard にたいする愛情から生ずるものであるが、とくに第
二の原因は夫にたいする彼女の愛情の並ならぬ深さを示している。

Some unborn sorrow ripe in Fortune's womb
Is coming toward me.

(2.2. 10~11)

彼女を慰める Bushy が鈍感なのにくらべ、彼女が鋭く王の悲運を予感してい
るのは、政治的な感覚ではなくて深い愛情のためである。このことは間接的に
Richard の彼女にたいするふだんの態度を物語っている。彼女が夫を“my

sweet Richard”と呼んでいることからもうかがえるように、Gaunt にたいする egocentric な冷酷さにもかかわらず、すくなくとも王妃にとっては優しい夫であったと想像される。

次に彼女が登場するのは York 公の庭園（3の4）である。彼女は庭師たちが「政治の話をする」だろうと考え、それを聴くために侍女たちと身をかくす。しかし結局彼女には「政治の話」は理解できない。彼女にあるものは子供のように幼い理解だけである。彼女の愛情は盲目的であり、夫の“weaved-up follies”も“profane hours”も最後まで眼に見えない。子供のようなこの愛情と信頼のゆえに庭師は彼女をあわれみ、彼女が涙を落した場所にヘンルーダの花壇をつくるのである。

次に、そして最後に彼女が登場するロンドン塔への道では、彼女にたいする Richard の愛情と 思いやりが はじめて直接観客に示される。この場面について Ю. Шведов は「Richard の精神的浄化ののち、かつて放埒な生活によって荒廃していた彼の心に、妻への愛情が再び席を占めた⁽⁸⁾」と述べている。しかしここで彼が使っている‘разврат’という言葉は、さきに引用した Bolingbroke の説明に近い内容を意味する。すなわち全体的な文脈からすると不適切な表現である。Richard の「放埒」には性的な implication がない。だからこそまた王妃にとって彼は終始“my sweet Richard”だったのである。

けれどもかつての Richard は、権力にたいするおもねりと、人間的な愛情との区別がつかなかった。権力を一切失ってしまった現在、彼ははじめてその相違を見分けることができるし、また愛されることの幸せと悲しみを理解することもできる。つまりここにあるものは甦った愛ではなく、深化した愛であって、この場面の美しさはそのような事情に由来する。

(3)

Ireland から帰国して Wales に上陸した Richard は、海岸で次から次へと打撃的な凶報を受けとる。Wales にいた一万二千の軍隊は、国王が死んだという噂を信じて解散してしまった。民衆は老いも若きも、女も子供も武器をとっ

て反逆した。かつての寵臣たちは Bolingbroke によって Bristol で処刑された。最後の頼みの綱である York も Bolingbroke と合体した。そこで、

By heaven I'll hate him everlastingly
That bids me of comfort any more...

(3. 2. 208~209)

と言うほど絶望する。

今まで Richard は自分の権力に酔い、その権力を不当に行使し、卑俗な側近にとり囲まれて自分自身を見つめる機会もなく、また現実を直視し洞察する能力もなかった。ところがこの場面から彼は自分の悪政と犯罪がもたらした結果に直面しはじめ、きびしい現実を彼を開眼させはじめる。Шведов のいう ‘прозрение’ (視力回復) の過程が始まるのである。だから Richard の形象的発展という観点から見てもこの場面は重要な転回点である。

ところで Шведов は奇妙なことを言っている。⁽⁹⁾ 「Wales 人たちの裏切りに関する Salisbury の報告によって与えられた最初の打撃のあと、Richard は一瞬顔色を失う。はじめて彼の言葉に破滅的な調子がひびき、そのとき、自分の運命に関する最初のおぼろげな推測が Richard の言葉に新しい内容を与える。それは立派な没我的態度であり、自分の友人たちを不幸から救おうとする望みである。」その言葉というのは

All souls that will be safe, fly from my side.

(3. 2. 80)

の一行である。さらに Ю. Шведов は「もちろんこれはわずかな示唆にすぎないが、Richard の性格のそれ以後の発展を予告している」とつけ加えている。

いったい Richard のこの台詞は、味方の人たちの安全を考えた言葉なのだろうか。実はこれは絶望の表現である。「もうどうなっても構わない、みんな

勝手にしろ」という意味なのである。それは、「王国を失ったとて何の損失であろう」（95—96 行の趣旨はそういうことである）という気分と同一線上にある言葉である。第一に、主観的な強がりと無気力な失意との間を大きく往復すること、第二に、失意もまた彼の俳優的な性癖を満足させ、絶望も倒錯的な快感を与えることが彼の性格的特徴である。彼が

Of that sweet way I was in to despair!

(3. 2. 205)

と言うとき、いみじくも彼は自分自身の性格的特徴を的確に説明している。この場面の最後で彼の絶望が最高頂に達し、自分の軍隊解散を二度も命じているが、Ю. Шведов はこれをどう説明するであろうか。またしてもそれは「人々を無益な犠牲者にしたくないから」であり、それは「立派な自己犠牲」である。

私がむきになって Ю. Шведов の意見に反対するのは、実は彼の意見が私にとってきわめて attractive だからである。しかし軍隊解散命令についてもまた、この場面全体の文脈は彼が受けとったのとは異った印象を私に与えるのである。

人間 Richard の自己認識が展開することを予想させるような箇所が、もしこの場面にあるとすれば、それは 160—170 行である。彼はここで今までの自分の愚かしさを覚りかけている。ここに現われる ‘antic’ とか ‘scene’ とか ‘monarchize (=play the part of a king)’ とかいう theatrical imagery は何を意味するのであろうか。自分が今まで住んでいたのは現実の世界ではなく、想像された、あるいは創作された虚構の世界であったという漠然とした意識が、それらの imagery の背後にある。そして

To monarchize, be feared, and kill with looks...

(3. 2. 165)

の一行が権勢を誇っていたかつての自分自身を自嘲的に指しているとするれば、“self and vain conceit (166行)” という言葉も鋭く自分自身にむけられたものである。ここで彼は“stories of the death of kings”を語っていることになっているが、そこにあるものは実は自己省察である。

人が畏れたのは Richard 自身ではなく、Richard が演じていた役割であった。それは国王その人ではなく国王の権力と機能であった。それらが別別のものであったことを彼はようやく理解しはじめる。それが

Cover your heads, and mock not flesh and blood…

以下の台詞 (171—177行) へと自然につながってゆく。“flesh and blood”の意味は“mere human being (like yourselves)”である。ここには絶望と自嘲だけでなく、同時に以上のような発見がある。それはまた、‘the paradox of the human frailty and divine attributes of royalty’⁽¹⁰⁾を意識しはじめたということでもある。

(4)

Flint 城で Richard と Bolingbroke が会見するところは、Bolingbroke が Brittany から戻って来てからはじめて Richard と会う場面である。Bolingbroke はまず Northumberland を代理人として Richard のところへ行かせ、自分は後方で軍隊を行進させることにより、静かな力の示威を試みる。

Let's march without the noise of threatening drum,
That from this castle's tattered battlements,
Our fair appointments may be well perused…

(3.3. 51~54)

そしてすぐあとで述べるように、Bolingbroke の狙った心理的効果は彼の期待

どおりに生ずるのである。

Bolingbroke が Northumberland に与えた口上 (35—42 行)、そして実際、Northumberland が Richard に述べる口上 (112—118 行) によれば、Bolingbroke の帰国は追放刑の取消しと没収された世襲財産の返還を求めるためであり、それ以上のものではない。それはもしこの二つの要求がいれられるならば服従と忠誠を誓うというものであった。ここで Richard はわざとこの口上を額面どおりに受けとることもできそうであったが、彼はそうしなかった。この点について Quiller-Couch は次のように述べている。⁽¹¹⁾「もし Richard が冷静であったら彼にはまだチャンスが残されていた。Bolingbroke に誓いを守らせようとすることによって彼に軍隊を解散させるか、力づくで国王を捕えるかのどちらかを選ばせることもできた。」もし彼が軍隊を解散させなければ、あるいはその軍隊を、Richard の「足下に捧げ」なければ、Bolingbroke は誓いを破ることになる。「しかし Northumberland が戻ってくるのを見て Richard は非常に動揺したので、Bolingbroke が切望しながらもあえて要求できなかった、まさにそのものを提供するのである。」

最初 Northumberland を相手に国王らしく毅然と振舞うことができたのに、二度目は急に弱々しくなったのはなぜか？ Bolingbroke の軍隊が示威行進をしながら、Richard を心理的に圧迫したからである。Richard にはたしてチャンスが残されていたかどうかは疑問である。今さら Bolingbroke にとって軍隊を解散することがいかに致命的な結果をもたらすかは明らかなことであるし Northumberland たちの手前を考えても不可能なことである。しかもすでに彼は Richard の直接の家臣 Bushy, Green, Wiltshire などを勝手に処刑していることを考えるならば、Bolingbroke の

My Gracious lord, I come but for mine own.

(3. 3. 196)

を額面通りに受けとるわけにはゆかない。Richard が屈服するのは必然の成行

きである。

この場面で Richard にとって王位とは何であったかが明らかになる。比較のために Henry VI を例にとると、彼にとって王冠はまったくの重荷であった。彼は統治者としての能力をもたなかったが、統治者としての義務には敏感であった。強い義務感とは対照的な弱い能力が彼の悲劇の一原因であった。王冠にたいする執着が彼に全然なかったとは言えない。しかし彼が単なる一人の臣下になりたいと願⁽¹²⁾い、また羊飼⁽¹³⁾の身分をうらやむとき、彼は本音を吐いている。しかし Richard II が

...my jewels for a set of beads;
My gorgeous palace for a hermitage;
My gay apparel for an alms-man's gown;
My figured goblets for a dish of wood;
My sceptre for a palmer's walking staff;
My subjects for a pair of carved saints,
And my large kingdom for a little grave.

(3. 3. 147—153)

と言うとき、前後の関係から推察されるように、彼は心から隠者の生活にあこがれているのではない。それは傷つけられた自尊心の呻き声であり、彼が捨てたがっているものの列挙ではなく、逆に彼が執着しているものが何であったかを説明する。それはまず、宝石、豪華な宮殿、華美な衣裳、精巧なつくりの酒杯などによって象徴されるぜいたくな生活であり、次にそれは大きな王国と多数の臣下によって象徴される国王の威信である。そしてこれらこそ Richard の意識にあった王冠の意味に他ならない。M. M. Reese も指摘するように、‘royal office’ は彼にとって何よりも特権の源であり個人的な満足であって、義務感というものが彼には欠けていた。⁽¹⁴⁾

(5)

Gloucester 暗殺の件は第四幕第一場で再び問題になる。この場面では Aumerle がその下手人だということで、彼に不利な証言が次々になされる。この Aumerle 弾劾は「明らかに Bolingbroke の指嚇によるもの」と J. D. Wilson は述べているが、⁽¹⁵⁾なるほど彼をここで取り巻いている連中はみな Bolingbroke の味方であって、裏に画策のありそうなことは容易に推察される。あらためてこの事件をとりあげて追及することは、Richard の立場をますます不利にし、彼の廃位をそれだけ容易にするであろう。同時に終始 Richard の忠実な味方であった Aumerle を窮地に落とし入れることもまた動機の一つであろう。

彼らの証言を信ずるならば、Gloucester を殺害せよという Richard の命令に、Mowbray は従うことを拒否し、Aumerle がそのかわりに二人の部下を刺客として送ったということになる。この劇の提示部分で Mowbray が「臣下の務めを怠った」と言った言葉がここで想起される。Carlisle の証言によれば、Mowbray は立派な人物であった。追放された彼はイエス・キリストのために十字架の旗をひるがえし、何度も邪教徒たちと戦いを交えた。戦いに疲れた彼は最後にイタリアに退き、Venice で魂を神に捧げて異国の土に埋められた。Carlisle が高潔な僧侶として描かれていることを考慮すると、この証言には信憑性がある。

Bolingbroke は Aumerle と Mowbray を対決させることを望んだ。対決させることによって、Richard の犯罪を明るみに引き出そうとしたのである。しかし Mowbray の死によって両者の立合いは実現不可能となった。Aumerle と Fitzwater たちとの立合いも、Bolingbroke の

Lord appellants,

Your differences shall all rest under gage,

Till we assign you to your days of trial...

(4.1. 104~106)

という言葉にもかかわらず結局実現しない。

Aumerle にかげられた嫌疑はほぼ決定的であるが Bolingbroke の意図していた正式な対決はいずれも実現せず、この問題は黒白が決定的に争われることなく劇は終わってしまう。にもかかわらず四幕一場中のこの場面は不必要な場面ではない。それどころか、次の三つの意味で重要である。まずそれは Mowbray の肖像画を完成して、Richard の二重の罪 (Gloucester の暗殺と Mowbray の不当な追放) を強調する。二番目に、Aumerle が Bolingbroke にたいし陰謀を企てる動機に必然性を与える。最後に——これは最も重要なことであるが——Bolingbroke に状況を支配する立場を与え、彼が実力で手に入れた威信を示させる。同じ第四幕第一場の後半で、Richard と Bolingbroke を対比させるための準備である。

ここで Bolingbroke が Aumerle とその他の貴族たちとの争いをたちまち抑えてしまったことと、劇の最初の場面で Richard が Bolingbroke と Mowbray をなだめることも和解させることもできなかったこと(すなわち勢力ある人の貴族の争いを適切に処理しえなかったこと) とを比較して、John Palm はそこから一つの意味を引き出し、⁽¹⁶⁾「第一幕 第一場で Richard が直面した “political situation” は、第四幕第一場で Bolingbroke が直面したものとすべての点で同じであり、Richard はそれに対処する能力がないのに Bolingbroke はたちまち問題を処理して秩序を維持する。第四幕第一場のこの場面は、Richard に欠けている政治的能力が Bolingbroke に備わっていることを示すために工夫された場面である」という趣旨のことを述べている。Irving Ribner も同様な趣旨の文章のあとで Palmer の説明を引用している。⁽¹⁷⁾

Palmer は “a situation precisely similar at all points” とか “precisely the same political situation” とか言うけれども、果して二つの situation は同じであろうか。似ている点は、J. Palmer も I. Ribner も指摘するように、争っているのが勢力ある貴族たちであること、彼らの間で Gloucester 暗殺事件の共犯関係が問われていること、お互いに決闘を挑みまた挑戦に応じたことなどである。しかしこれらはすべて外面的な事情であって、実は重大な相違が両

場面の間にある。

劇の最初の場面で Bolingbroke は Mowbray を告発している形になっているが、実は挑戦は Richard に向けられたもの（別の文脈では J. Palmer もこのことを指摘している）であって、Richard はいわば被告席に立たされている。Bolingbroke の Mowbray にむけられる糾弾が激しければ激しいほど、Richard の動揺は大きい。Bolingbroke が何を言わんとしているかは、Richard のみならず臨席しているほとんどすべての貴族たちが気付いているところであり、彼らが気付いているというそのことを Richard は狼狽しながら意識している。Richard が権力を行使して Bolingbroke と Mowbray を国外に追放するのが第三場であって第一場でないのは、そのような動揺と狼狽のためであろう。

第四幕第一場における Bolingbroke は、第一幕第一場における Richard とは異なり、被告の立場にあるのではなく、告発者の一人として登場する。しかも貴族たちによる Aumerle の糾弾は、前述のごとく意図あって Bolingbroke の仕組んだものであり、Bagot, Fitswater などは最初から Bolingbroke の手中にある操り人形にすぎない。

このように考えてくると、両場面のコントラストは、貴族たちの争いを抑える政治的力が Bolingbroke にはあって Richard にはない（実際そのとおりなのであるが）ということを示す単純なコントラストではない。それは犯罪者としての国王が没落してゆく一方、告発者としての Bolingbroke がのしあがってゆくという図式でもあり、Richard の犯した重大な犯罪が、彼を没落させた致命的な原因の一つであったことを強調している。

(6)

Richard はなぜ自分が Westminster Hall の議会に引っぱり出されたのかを訊ねる。それにたいする York の

To do that office of thine own good will,
Which tired majesty did make thee offer :

The resignation of thy state and crown

To Henry Bolingbroke.

(4. 1. 177~180)

という答えによれば譲位が Richard 自身の意志によるものであることと、譲位の原因は彼が国王であることに疲れたことであるとされている。このことは Richard 自身の言葉によって裏書きされる。彼は

I give this heavy weight from off my head,

And this unwieldy sceptre from my hand...

(204—205)

と言いながら王冠と sceptre を渡す。彼にとって王冠はすでに ‘heavy weight’ であり、sceptre は ‘unwieldy’ なのである。

譲位が「自発的」行為であることは、上の二行に続く

With my own tears I wash away my balm,

With my own hands I give away my crown,

With my own tongue deny my sacred state,

With my own breath release all duteous oaths.

(4. 1. 217—220)

もまた示している。ところで “With my own…” のくり返しはいったいどういう意味をもつのであろうか。それはもちろん、まず第一に [“self-deposition” というテーマの強調⁽¹⁸⁾] である。しかし I. Ribner はこの自発性が強制された自発性だということに触れていない。

Richard はなぜ疲れたのか？ なぜ王冠は彼にとって重荷となったのか？ Bolingbroke は彼から王位を強奪しようとはしなかった。Bolingbroke は彼が

次第に孤立し無力になってゆくのを待っていた。時機が熟するのを待っていた。というよりは時機を熟させるべく、じわじわと Richard をのっぴきならない破目に追いこんでゆく。疲れ果てた Richard が王冠を投げ出さざるをえないように仕向けてゆく。Bolingbroke の目的は

…in common view

He may surrender ; so we shall proceed

Without suspicion.

(155—157)

であり、彼はついにその目的を遂げるのである。すなわち自発的譲位という形式にすべての成行きを集約させることができた。

“With my own…” のくり返しは自発性主体性を強調するレトリックであるかもしれないが、同時に、言葉の飽和現象によって *ironical* なニュアンスを生み出しているようにも思われる。これに続く彼の台詞の最後の三行

God save King Henry, unkinged Richard says,

And send him many years of sunshine days…

What more remains?

(220—222)

でその *irony* はかなり露骨になる。ここで Richard が本心を述べていると考える観客はあるまい。「このわたしにまだ言わせたいことがあるのか？ これだけ言えばおまえたちも満足だろう……。」

彼は自分が廃位され没落してゆく原因を理解した。そのような理解は IO. Шведов も指摘するようにこの場面ではじめて現われる。弾劾状を読むべく Northumberland に強要されると、Richard は

…and must I ravel out

My weaved-up follies?

(228—229)

と言ってこれを拒否する。彼はここで過去の愚かしさを認め、しかもその愚かしさはくり返され、‘weave up’されたことを痛感し、それを恥じているのである。自分を恥じるという感情もまた彼にとってはまったく新しい体験であった。

この場面のすぐまえに York 公の庭園の場が置かれていることは注目に値する。庭園の場は Shakespeare の独創になるもので「まったく fictitious なもの⁽¹⁹⁾」であるが、ここで庭師たちはいわば chorus 役として登場し、Richard の ‘weaved-up follies’ を観客にたいし簡明かつ要約的に ‘ravel out’ して見せるのである。この場面は廃位の場面の直前に挿入するのが最も妥当であり、それより前であっても後であっても構成上の意味が減少する。

Northumberland は、国家の利益に反して Richard が犯した ‘grievous crimes’ を自ら読みあげてことを執拗に要求する。二度目の要求にたいし Richard が答える言葉にも自責の調子が響いている。彼は Northumberland などと一緒に、自分で自分を廃位し、王の式服をはぎとり、主権を奴隷にし、神の定めた秩序を自ら破るという罪を犯す。現在の立場に自分を追いこんだのは自分自身の過去の愚かしさでもある。だから、自分自身もまた国王 Richard にたいする謀反人である。彼は自ら王位の神聖な属性をけがしたことになるのである。この六行の内容は ‘and must I ravel…follies?’ の延長上にあると考えてよい。

三度目の要求にたいし、Richard の答える言葉も意味深長である。そこでもやはり彼は自分の犯した罪を認めており、罪がすっかり書きこまれた書物は自分自身であり、その罪状が記録された「自分自身」を読むためにも鏡を見るのである。Richard が鏡を見たかったのは「破産した王の威厳」を見たかっただけではない。道化芝居じみた言動であることは否定できないが、そこにあるも

のは演技欲と自己顕示欲だけではない。

P. Ure は鏡というものを ‘the double-edged symbol of vanity and truth-telling’ だと説明している。⁽²⁰⁾「Richard は鏡の性質をあらわすものとして ‘flattering’ (したがってまた人を欺く) という言葉を使っているが、これはあらゆる種類の鏡を形容する言葉として、きわめて一般的に使用されていた。」他方においてまた「鏡は物事の真の状態をうつし出すという属性」をもっている。P. Ure は両者の使用例をいくつか挙げたのち、「Shakespeare はここで、これら両方の connotation を意識していたかもしれない」と述べている。後者の connotation については、Hamlet が俳優たちに芝居の心得を話すときの言葉⁽²¹⁾が想起される。

(7)

ひきつづいて次の(ロンドン塔へ行く道の)場面でも、Richard の自己反省と自己認識をうかがうことができる。ここでは飾り気も衒いもない赤裸裸な人間 Richard の姿が見られ、彼のすべての言葉に真実味がある。

Our holy lives must win a new world's crown,
Which our profane hours here have thrown down.

(5. 1. 24—25)

ここで彼は自分の過去が ‘profane hours’ であったことを認め、それが原因で王位を失ったことを認めている。これを君権神授説という文脈の中に置けば、たとえば聖油を塗られた神聖な国王であっても、神を瀆す生活を送れば神に見離されるという認識であり、かつて盲目的に信じていた君権神授説の(否定とはいわぬまでも)現実主義的な修正である。

Pomfret 城に幽閉され、運命に耐えることを自分に納得させるべく心の中で自分自身と問答をしているうちに音楽が聞こえてくる。彼はそのとき、国の政治という音楽が調子外れになっていたのに、それを聞きわける耳をもたなかつ

たことを悔やむ。

And here have I the daintiness of ear
To check time broke in a disordered string ;
But for the concord of my state and time
Had not an ear to hear my true time broke.

(5.5. 45—48)

しかし現在の彼には、音楽などにゆっくり耳を傾けている気持の余裕などはなく、却っていらだちは増すばかりで、ほとんど気が狂いそうになるくらいである。しかし彼は次のように思い直す。

Yet blessing on his heart that gives it me !
For 'tis a sign of love ; and love to Richard
Is a strange brooch in this all-hating world.

(5.5. 64—66)

最後の行を paraphrase すれば 'Is a rare jewel in this world which is entirely filled with hatred' ということになる。ほんの些細な愛情のしるしでも現在の彼にとっては貴重な宝石なのである。この音楽はひよっとしたら（というよりは多分おそらく）誰かが自分自身のために演奏しているものかもしれない。しかし Richard はそれが自分のために弾いてくれるのだと思わずにはいられないほど愛情に飢えているのである。

おりしもこの独白の直後に、かつて彼に仕えたことのある馬丁が彼を慰めに訪れる。Richard の喜びがどんなに大きかったかは容易に想像できる。馬丁は Richard に会うため非常に苦勞し、やっとのことで面会の許可を得た。Richard のところへ来る者と言え、今では食物を運んでくる牢番だけなのである。

短い場面であるが、この馬丁は心にくいほど見事に描かれている。彼は自分の職業に関した事、つまり馬のことしかわからず馬のことしか語らない。彼がかつて一生けんめいに世話をした Richard の馬が、即位式の日新国王 Bolingbroke をのせて進むのを見て、彼はとても悲しかった。それが Richard に一番言いたかったことであり、Richard に会うまで彼の念頭を支配していたことであった。そのような話題によってのみ彼は Richard にたいする愛情を表現することができる。「言葉に出して言えないことを心の中で語る」素朴な彼は、にもかかわらず、というよりはかえってそのために今では Richard の心を暖める。

しかし馬丁がいつまでもそこにぐずぐずしていることは危険である。

If thou love me, 'tis time thou went away.

(5. 5. 96)

このような配慮は、かつての Richard だったらありえなかったものである。馬丁にたいする Richard のこの心づかいは、第一幕第四場に見られる、平民にたいする彼の侮蔑的態度とは鮮かな対照をなしている。Richard のこのような人間的成長は、もちろん彼の体験した苦悩をもたらしたものである。

(8)

Pomfret 城内で Richard が死ぬときは、彼が勇敢に行動した最初にしてかつ最後の時であった。丸腰の彼は敵の一人から武器を奪って闘い、暗殺者たちの二人までを倒すのである。Richard を刺した Exton は

As full of valour as of royal blood.

(5. 5. 113)

と感嘆せざるをえなかった。この最後が、かつての馬丁に示した人間らしい思

いやりの直後であるため、その勇氣はいっそう印象的となる。

意志の弱さと肉体的勇氣は両立しうる。Richard が今まで臆病に見えたのは彼に意志の力がないたためであり、精神が脆弱だったからである。この劇の中では、彼は今まで直接さし迫った肉体的危険にさらされることはなかった。歴史的人物としては、かつて若かりし頃、Wat Tyler の率いる武装した叛徒たちに対峙し、彼らを畏怖させたこともあるが、この劇の中では肉体的勇氣を発揮する機会が今までなかった。すなわち、ここには臆病な人間から勇氣ある人間への変化というダイナミクスがあるのではない。しかし、数の上で不利な格闘をおそれず、勇者としてふるまう機会を、作者がここで彼に与えたことは注目してよい。

彼が死ぬときの台詞

Mount, mount, my soul! thy seat is up on high.

について、研究社版テキストの序文では次のような感想が述べられている。

「われわれはそれを素直に受けとる。そして悲惨が和げられ、救われるのを感じ、心は洗われ、清浄となることを感じる。」このような考え方が一方にあるとすれば、もう一方の極端を主張する例として M. M. Reese の見解が挙げられる。Richard の死につき M. M. Reese は「彼が戦って死ぬことに慰めを見出すものもいるが、彼の最後の瞬間は彼の最も立派な言動からいくぶん後退している。……彼は暗殺者たちに『永劫に消えぬ火』を約束し、……彼の死は高慢であり無智であり絶望的である。同様な場合 Henry VI であったら自分の罪にたいする赦しと、殺害者にたいする赦しを（神に）もとめるであろう」と述べている。

この問題については、R. M. Frye の意見を紹介してみたい。“Mount, mount……”の一行について彼は次のように説明している。「Richard のこの言葉の大きな劇的な価値は、苦悩の中で性格が発展してゆくということが、この言葉の焦点になっているという事実にある。彼が最後に王妃と遭ったとき、

彼は

Our holy lives must win a new world's crown,
Which our profane hours here have thrown down.

(5. 1. 24—25)

と彼女に語る。また、その後牢獄における独白の中で

I wasted time, and now doth time waste me.

(5. 5. 49)

という。……かくして廃位された君主は謙虚と苦悩の修養によって天国への準備をする。」

あらゆる地位のシンボル、あらゆる権威のシンボル、すなわち人間にとって非本質的な属性をすべて剥ぎとられ、Richard は真の自己と対面せざるを得なくなる。そのときはじめて彼に 'win a new world's crown' という願望が生まれる。そして R. M. Frye の見解によればその願望は実現するのである。ただしその実現のために Richard は苦悩によって浄化されねばならなかった。

「苦しみ」(suffering) が死に備える学校であり、救いを得る機会を与えるという Calvin と Luther の説を援用し、R. M. Frye は「来世に関するこの教義の妥当性を示すような方法で Shakespeare が取扱った数少ない人物のうち、Richard II はその一人である」と結論している。⁽²²⁾

(9)

Shakespeare の歴史劇における予言というものをどう考えたらよいのであろうか。予言は歴史的発展の方向、その必然的な成行きを見通すことであり、予言者はそのような perspective を自分のものとした人物と考えてよいであろう。予言者は「現在」という枠の中に閉じこめられた他の人物よりも優越した

立場にあり、またある人物がたまたま予言的な台詞を口にするときにも、その人物はその時その場所において他の人物よりも高い地歩を占めている。未来を洞察しているその時、彼はたまたま一種の chorus 役を演じているとも考えられる。

Richard の予言的な台詞を順次拾ってみよう。彼が自分の権力に酔い、自分を過信しているときの「予言」は主観的願望の裏がえしであって、その後の発展は彼の予想を裏切ってしまう。Wales の海岸に上陸したとき、最初彼は意気揚々としていた。そのとき彼は君権神授説の上に立って次のように「予言」する。

Not all the water in the rough rude sea
Can wash the balm off from an anointed king.
The breath of worldly men cannot depose
The deputy elected by the Lord,
For every man that Bolingbroke hath pressed
To lift shrewd steel against our golden crown,
God for his Richard hath in heavenly pay
A glorious angel; then, if angels fight,
Weak men must fall, for heaven still guards the right.

(3. 2. 54—62)

この「予言」は実現するどころか、同じ場面が終らないうちに Richard の幻想はうち砕かれてしまう。天使は彼に味方せず、神は彼を見離す。次々と届く凶報にうちのめされて、Richard は「絶望への甘い道」をたどりはじめる。次の場面で再び君権神授説をふまえた予言がなされる。

Yet know, my master, God omnipotent,
Is mustering in his clouds, on our behalf,

Armies of pestilence, and they shall strike
Your children yet unborn, and unbegot,
That lift your vassal hands against my head,
And threat the glory of my precious crown...

(3. 3. 85—90)

この予言は適中する。同じ Richard が述べる同じ君権神授の思想であっても、第二場と第三場とではすでに微妙な変化があらわれている。この屈折はもちろん現実主義的な修正である。すぐあとに続く

Ten thousand bloody crowns of mothers' sons
Shall ill become the flower of England's face,
Change the complexion of her maid-pale peace
To scarlet indignation and bedew
Her pasture's grass with faithful English blood.

(3. 3. 96—100)

は、Westminster Hall における Carlisle の有名な台詞と同様、Northumberland などの叛乱や、Lancaster 家と York 家の相争う内乱の予言となっている。

Richard が神——自分が地上におけるその代理人だと考えかつ主張した——というものを結局どう見るようになったか、換言すれば神と自分との関係を最後にはどう把握するようになったかを示すのが、前にも引用した

Our holy lives must win a new world's crown,
Which our profane hours here have thrown down.

(5. 1. 24—25)

という台詞である。地上で自分は神をけがす生活を送った。その結果王位を失ったが、これからは信心深い生活を送って、新しい世界の王冠を手に入れるのだ……。この二行を、かつて彼が神の加護を盲信していたときの台詞と比較するとき、はっきりと Richard の再生した姿を見ることができる。そしてここで、君権神授説はより更に修正されていると言えよう。

London 塔へ護送されてゆく途中、Richard は待ちうけていた王妃に出会う。そこで二人の間にかわされる会話は、美しく哀切きわまりない。そのとき Northumberland が登場し、行先が London 塔から Pomfret 城に変わったことを告げる。そのとき Richard は次のように Northumberland を詰る。

Northumberland, thou ladder wherewithal
The mounting Bolingbroke ascends my throne,
The time shall not be many hours of age
More than it is, ere foul sin gathering head
Shall break into corruption. Thou shalt think,
Though he divide the realm and give thee half,
It is too little, helping him to all...
And he shall think that thou, which knowest the way
To plant unrightful kings, wilt know again,
Being ne'er so little urged another way
To pluck him headlong from the usurped throne :

(5. 1. 55—65)

この予言は Henry IV の第二部で実現するが、今では王位についている Bolingbroke すなわち Henry IV は、Richard のこの言葉(これを Henry は Warwick から伝え聞いたことになっている)を想い出し、その鋭い洞察に驚嘆する。⁽²³⁾

When Richard, with his eye brimful of tears,

Then checked and rated by Northumberland,
Did speak these words, now proved a prophecy?
'Northumberland, thou ladder by the which
My cousin Bolingbroke ascends my throne'

'The time shall come,' thus did he follow it,
'The time will come, that foul sin, gathering head,
Shall break into corruption': so went on,
Foretelling this same time's conditon,
And the division of our amity.

(3.1. 70—79)

これにたいする Warwick の合理主義的なコメントも傾聴に値する。

There is a history in all men's lives,
Figuring the natures or the times deceased:
The which observed, a man may prophesy,
With a near aim, of the main chance of things
As yet not come to life, who in their seeds
And weak beginnings lie intreasured:
Such things become the hatch and brood of time...

(3.1. 80—86)

ここでは歴史的な法則が存在すること、その認識が可能であること、Richard はそのような認識の上に立っていたことが語られている。Richard が「完全な予見」('perfect guess') をなしえたのは、未来は過去の中にあるという、過程の「必然的な姿」('the necessary form') を見ることができたからであった。

この最後の予言は今まで列挙したものと異なった面をももっている。それは

Northumberland という人物の性格と潜在意識を見通す鋭い理解であり、そこから帰結として生ずる将来の彼の行動の的確な予見である。これもまた逆境が Richard に与えた能力である。そして人間と歴史にたいするこのような洞察のみならず、その他さまざまな美德と力が、没落し破滅してゆく過程の中で生まれかつ育ってゆくところに、彼の悲劇の美しさがある。

注

- (1) モローゾフ著、中本信幸訳『シェイクスピア研究』、2 ページ。
- (2) 同書、196—197 ページ。
- (3) O. J. Campbell (ed.), *The Reader's Encyclopedia of Shakespeare*, p. 692.
- (4) Walter Raleigh, *Johnson on Shakespeare*, p. 111.
- (5) S. T. Coleridge, *Shakespearean Criticism*, Volume II, pp. 146—147.
- (6) S. T. Coleridge, *Shakespearean Criticism*, Volume I, p. 139.
- (7) *Holinshed's Chronicle* (Everyman's Library), p. 51.
- (8) Ю. Шведов, *Исторические Хроники Шекспира*, p. 113.
- (9) *Ibid.*, pp. 107—108.
- (10) J. D. Wilson, *King Richard II* (Cambridge Shakespeare), Notes, p. 187.
- (11) A. T. Quiller-Couch, *Historical Tales from Shakespeare*, p. 108.
- (12) *Henry VI*, Part II, Act 4, Scene 9, ll. 5—6.
- (13) *Henry VI*, Part III, Act 2, Scene 5, l. 41.
- (14) M. M. Reese, *The Cease of Majesty*, p. 244.
- (15) *Op. cit.*, Introduction, p. lxxvii.
- (16) John Palmer, *Political Characters of Shakespeare*, p. 160.
- (17) I. Ribner, *The English History Play in the Age of Shakespeare*, p. 160.
- (18) *Ibid.*, p. 162.
- (19) J. D. Wilson, *op. cit.*, p. 195.
- (20) P. Ure, *King Richard II* (The Arden Shakespeare), p. lxxxii.
- (21) *Hamlet*, Act 3, Scene 2.
- (22) R. M. Frye, *Shakespeare and Christian Doctrine*, pp. 179—181.
- (23) *Henry IV*, Part II, Act 3, Scene 1, ll. 66—79.